

2011年、今年で6回目のBumB「中学生の映画塾」映画制作ワークショップ

■映画塾全18回の実施内容

参加した中学生28名の作文を元に、映画のシナリオ(脚本)を作り、撮影の機材(ビデオカメラやマイク)の扱い方を学び、ロケハンやリハーサルなどを経て、撮影開始となります。参加者全員が全ての役割を経験できるようにそれぞれのシーンやカットごとにローテーションで役割を担当します。撮り終えた映像の編集や音入れも含めて全員が力をあわせて映画作りをします。今年で6年目の「中学生の映画塾」は、子どもたちがより自由に映画作りができるよう工夫をしています。3チーム編成で作品の長さはそれぞれ15分程度におさえ、映画学校の学生や高校生ボランティアが各班でアドバイザーやサポートスタッフを務め、指導監督は全体を大きくとらえながら、助言を与えていくという形で行いました。

チームA「嵐ーハリケーンー」

作品名 **空っぽの石**



チーム「HIGHBRIGE」

作品名 **ガンラッシュ**



チーム「シネ★ラヴァ」

作品名 **迷走のシネ★ラヴァーズ**



「あひがとじー」
指導監督 福田 陽平
映画監督

中学生の映画作りの中で沢山のドラマを見せて頂きました。ありがとうございます！せっかくなんで僕の簡単な感想でも書きます。

「空っぽの石」は、まず脚本が面白かったです。

ただの恋愛ドラマじゃなく、アユムが大人になっていく過程のお話。小学校と違ってあまり男女の差がなく、低学年時なんかは、手をつながれたりしててもあまり考えなかったよね。でも中学になっていくの間に心が成長して、男として意識するようになる。その戸惑いや照れなどすごく正直に描かれていると思う。自分に正直に脚本と向き合っているからこその素晴らしい脚本が産まれたんだと思う。

それに役者も良かったです。お芝居が上手い事より、キャラクターにリアリティがあった。ナイスキャストイングでしたね！作品の中で実際に生きていく様に感じてもらいたい。

「ガンラッシュ」

映画って初期衝動が大切になって、本当に思いました。アクションだった映画。興奮だったり、憧れだったり。感動だって勇気だってもらえる。君らがアクションを撮りたい！と思いついて、そして選ばれた。まさに脚本会議の時の君らの戦いを見ているかの様な、そんなドラマでしたね！

それと評価された山本のよりのカット。あれは実は本になくて追加で撮ったんだけど、あのカットは作品で一番必要なカットで、それを必要だと瞬時に理解し、スケジュールを書き直して撮影した。でも、山本の気持ちを読み込めていたからこそ生まれたんだと思う。本来演出とはそういう仕事。だから立派に監督できてたって事だよ。

「迷走のシネ★ラヴァーズ」

映画部は、自己主張もなく、友達に本音も嘘付いてしか言えないユウキ。そんな彼らの元に、自分勝手な転校生が現れ巻き込まれて映画作りをする。そうしていく事で彼らは自分たちの意思や主張も芽生え、最後は本音で喧嘩をする。本音で言いあえる仲間。それは信じているからできる事。ユウキはそれをわかっていたながらも、杏のおかげで改めて気付かされる。僕は過去の名作と同じ感動を彷彿させられるくらい素敵なお話だったと思います。役者も良かったですね！個人的には力な演じる岩山が芝居うまいなあと思いました。

それと角田君の優しいボイスの「ヨロイスタート」は、とくに良かったです。

君らが一生懸命、愛を込めて作品を作ってくれたおかげで、今年も素敵な作品を三本も観る事ができました。ありがとうございます！



佐藤さんと福田さんは映画学校時代の教師と学生という関係です。

「福田監督がくれた3作品の感想」

「感想文・数年前の映画塾から」



小池 芽(現在高校生)

二日目
この日は途中から雨が降り始め、外での撮影は中止。それで少し計画がズレ、ぼくは役者からスタッフの仕事になった。このことで「計画力と非計画力の判断」というものが分かった。世の中では、何かを計画的に、機械的に行う作業が中心となっている。これが「計画力」。その中で、今回のように天気・状況の変化がある場合もある。そんな時、臨機応変に対処する力が「非計画力」。前者だけでは頭が堅く、後者だけではいい加減。しかし両方がそろい、その使い分け・判断ができれば「計画性もあり機転が利く」ということになる。映画をつくる上ではこのような土台が支えあっている。また、このような仕組みは社会の縮図であるとも言えるだろう。この力がだいぶ身につけてきたと思った。

三日目
この日は皆だいが動きが分かってきて、5シーン程撮れた。一番クライマックスの部分も撮り、ラッシュ(試写)も見たのだが、スッポリ抜けてたり、線が入ってたり、画面が汚れてたり、雑音が入ってたり、演技が学芸会みたいだったり……というものがいくつかあった。リテイクしたいと思ったが時間はあるか……このことで「全体視力」が大切だと分かった。

時間・個人の意見・問題などがこちゃこちゃになり、細かい所でカメラマン・役者・録音：はてはカメラの機材までも全てが関わり映画をつくる。このためそれぞれに気を配る「全体視力」が必要なのだ。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の精神なのだ。

四日目

この日、クライマックスで使う車のカットを撮っていった。映像は交互に、車・人・車・車のアップ・人のアップで音が「キキッ」と入って……、人が道で倒れ、タイミングよく車が通る……で交通事故のシーンができた。このように「情報操作力」を学んだ。無論今、大人の世界——政治・金・インターネットなど悪い面での力は問題になっているが、いい面でのこの力は大切だと思った。そのことを皆忘れている。映画づくりでのこの力が例である。嘘であるから分かっておきさえすれば、それを見た人を笑わせることができるのだ。

情報というのは色々な表し方がある。色々な考え方があって、ステレオタイプが分かりやすい……いやリアリティ・もっと深く・とにかく楽しく……この、なるべくたくさんの人々の意見をとり入れるには一つの物語を、色々な視点から見ていくのだからに必要なのがこの「情報操作力」なのだ。

(中略)

最後に、一番おもしろかったのは学校での撮影で、自分にとって学校というありふれた日常の中で撮るのだ。学校独特のふんいきの中、学生服だどうしても緊張していたが、「もっと自然に」と言われて気づいた。規則的ななんなのと何か大きな力ではばられ、封じられている気がするこの場所が、映画づくりではただの「シーン」だ。廊下を走りましょ！ふざけましょ！きちんと整理しないぞ！ロケ場所を提供してくれた方には最低限のマナーを守る事は必要だが、表現にはマナーも何もあっちゃあいないな。この映画づくりはほんとに「表現について考える場」になったと思う。一つの表現をするのでも「現実的なうそ」「うそに見える現実」・「自然に見える不自然」「不自然に見える自然」などあり、それらの使い分けがとても難しい——というより答えなど無い、ということも分かった。

特に映画は(絵「脳」→文「台本」→絵「映像」という転換があり、そこでも解釈によって、違いができてしまう。それらをまとめるのに本当に必要なのは「伝えたい」と言うたそれだけの心なのだ。

「今、中学生につけたい力 ーもう、指示待ち人間ではないー」

江東区立深川第七中学校教諭 中村 郁子

今年の夏、学級担任をしている三木正義君のお父様から正義君が映画塾に参加し、映画作成、そして、自身も映画に出演するというお話を伺いました。映画作りにおいては全く素人の私ではあります。国語科の教員として、また、演劇部顧問として「言葉にこだわる」ということに共通性がある映画作成に対し興味をわきました。また、クラスでもアイドル的存在な三木君がどのような役をどのように演じるのか確かめたくて上映会には是非参加させていただこうと思いました。

そして、実際に上映会に参加させていただきました……。生徒たちが作り上げた作品を見る前に、私は圧倒させられてしまいました。上映会当日、開会式の後、作品上映に先立ち、「映画塾ドキュメンタリー」が、上映されました。映画塾に入塾した生徒たちが、どのように映画を作り上げていったのか、その過程を示すドキュメンタリーでした。映画塾とは、今、まさに今の中学生に必要な力を体得させる場であることを知らしめさせたドキュメンタリーでした。

ドキュメンタリーを拝見し、映画塾に参加した生徒は主に次の2つのことをおおいに学んだと感じました。一つは「話すこと」です。学校教育においても「話す力」「聞く力」重視という言葉を目にしますが、現実には、自分の思いや考えを的確な言葉で表現し、それを相手に伝えることを苦手とする生徒が多いように思います。それを、消極的な性格だからとかたづつてしまうことはいかかなものでしょうか。また、何かに対し、幾つかの違う意見が出てきた場合、それらの意見をどう総括していくのか、その役をリーダーとしてかかってる生徒を育成することに日々悪戦苦闘しているのが現実です。

この「話す力」をみごとにつけていたのが、この映画塾でした。自分たちはどのような映画を作るのか、まさに「産みの苦しみ」です。しかし、大人たちは待ち続ける。やがて幾つかの案が出て、人に意見を聞く。そして、解釈、そして、話し合わなければいつまでも方向性が定まらない。監督やアドバイザースタッフは決して生徒たちを甘やかさない。適切なアドバイスはしても、あくまで自分たちで考えさせ、意見を戦わせる。とかく大人たちは、答えをばやく見いださせたくておせっかいになりがちですが、映画塾のスタッフの方々はあくまでも真摯な態度で生徒と接していらっしゃいました。

そして、もう一つ、学んだこと、それは「指示待ち人間では何も始まらない。」ということ。ロケ中に、周囲の雑音が入ってしまう……。どうすればいいのか。「すみません、今ロケ中なのでしばらく静かに、協力御願います。」「だれかがお願いにいかなくてはいけないのに、誰かがやるだろう、自分がやらなくてもなどと、みんなが思っていたらいいようにロケはできない。映画塾の生徒は、「だれかが」ではなく、「自分が」動く、話すことの重要性を身体で感じる事ができたのでしよう。仕上がった作品を拝見して、中学生の力を甘く見ていた自分を反省しました。3作品とも、これが中学生の作品なのか、中学生がここまでやり遂げるのかと素直に感心しました。特に、「迷走のシネ★ラヴァーズ」は、圧巻でした。作品の出来もさることながら、映画塾に参加した生徒は、「これから生きていくうえで必要な力」をたくさんつけたにちがいないと思います。

■機材協力：日本フィルムセンター映画・俳優専門学校
スタジオDU、(株)DVC

■ロケ地協力：都立夢の島公園・東京夢の島マリーナ
大田区立東調布中学校

